



神戸ムスリムモスク

上：ドームやミナレットの銅葺の屋根は、新しい銅板と緑青の対比が目立つ。何うと、長い目で見れば薬品で人工的に緑青を発生させるよりも、自然になじむとのこと。

下左：モスクを写真に収めようとする時、電線に邪魔をされる。景観上の課題である。

下右：正面の入口。アラビア語でマスジドとある。

tsudoïメール配信のご案内

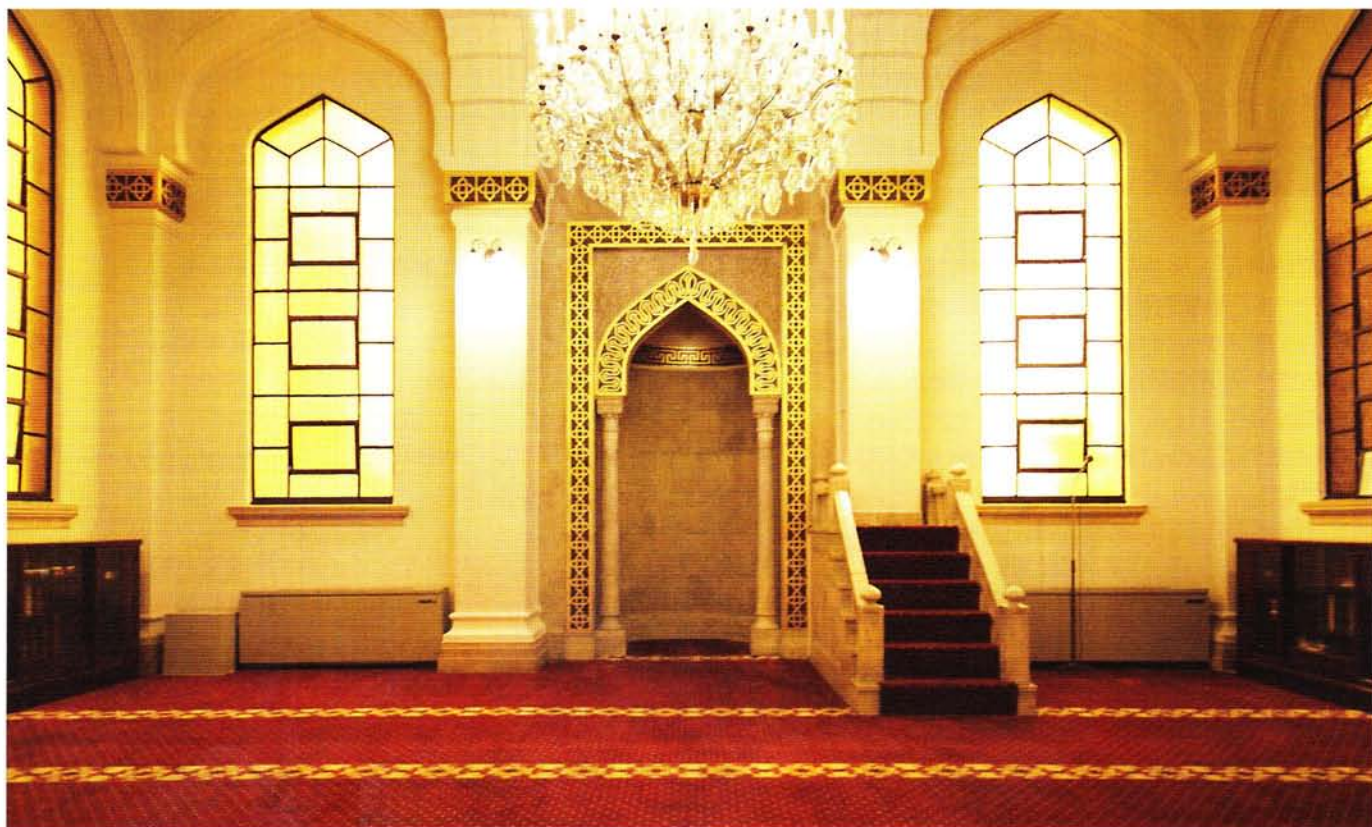
「集い」誌面に掲載できない情報などを、「tsudoïメール」としてメール配信しています。受信ご希望の方は下記まで、氏名・支部を明記のうえメールアドレスをご登録ください。宛先：下記の事務局メールアドレス（既に受信されている方は登録の必要はありません）

(社)兵庫県建築士会

URL:<http://www.hyogo-aba.or.jp>
e-mail:info2006@hyogo-aba.or.jp

特集 臨時総会と60周年記念式典

兵庫探訪 190 神戸ムスリムモスク



モスク内部

神戸・三宮の山の手、異人館通りの南西に神戸ムスリムモスクはある。異人館に比べると周辺を行き交う人の数は多くはないが、その姿は北野界隈の確固たるランドマークとなっている。イスラム建築で特徴的なドームと塔を持つ、我が国最古のモスクである。

■ イスラム教について

イスラム教は、預言者ムハンマド(570-632)を通じて、神から下された啓示を信仰するものである。その啓示を後年に集大成させたものが、根本聖典コーラン(クルアーン)だ。「アッラー(唯一の神の意)のほかに崇拝に値するものはない」とする唯一神教で、この点ではこれまでに紹介したユダヤ教やキリスト教と同様である。また、イスラム教では、ムーサー(モーゼ)やイーサー(イエス)も預言者であるとするが、最後に神から遣わされた使徒がムハンマドであるとする。そして、ユダヤ教の聖典(旧約聖書)や新約聖書もまた神からの言葉として、イスラム教の聖典であるとしている。

イスラム教徒のことをアラビア語でムスリムという。ムスリムが、日々の生活で欠かすことができないのが1日5回の礼拝(サラート)だ。その礼拝の場としてモスクがある。モスクは、アラビア語ではマスジド(平伏する場所の意)であるが、スペインでメスキータと訛り、フランス語でモスケ、英語でモスクとなった。全てのモスクは、カーバ神殿のある聖地メッカの方向(キブラ)の軸線上に建てられる。そ

の方位を示す壁龕(聖龕:ミフラーブ)のある壁(キブラ壁)に向かって、人々は礼拝を行うのである。

イスラム教では徹底的に偶像崇拝を排する。そのため、建築物においても、西洋におけるような宗教画などはなく、幾何学紋様の装飾が発達した。装飾には宗教的な意味はないというが、世界各地のイスラム建築を飾る紋様は精緻を極め、その美しさは世界に広く知られるところである。

■ 神戸ムスリムモスクの建設

日本人とムスリムの本格的な出会いは、1890(明治23)年にオスマン帝国から派遣されたエルトゥールル号の使節団であるとされる。使節団は熱烈な歓迎を受け、使節団を率いたオスマンパシャは明治天皇に拝謁する。しかし、その帰途エルトゥールル号は申本沖で台風に遭遇し遭難する。この出来事は日本とオスマン帝国(トルコ)の関係の一大転機となった。

貿易港神戸においては、インド人商人や中央アジアからの難民であるタタール人、トルコ人など、数百人のムスリムがいたらしい。彼らは礼拝する場所を求め、モスク建設の機運が高まった。資金は商人であるインド人が中心となり集めたという。モスクは1935(昭和10)年の献堂、設計はチェコ出身の建築家スワガー、施工は竹中工務店である。スワガーは、同じチェコ人であるアントニー・レーモンドと仕事を共にしていたとされる人物だ。

モスクは戦災において奇跡的に焼け残り、阪神・淡路大

震災でも大きな被害を受けず、周辺の住民の避難場所にもなった。モスクの理事の新井アハサンさんによれば、現在、神戸には約100人の信者が在住しており、金曜礼拝には多いときは周辺の都市からの信者も含めて200人程度のムスリムが集り、礼拝をおこなうという。

■ 神戸ムスリムモスクについて

モスクの中央部には玉ねぎ型のドームが乗り、それを取り囲むように北側に2本と南側に2本のミナレットと呼ばれる塔が立つ。ミナレットにはアザーン(サラートのための呼びかけ)のための回廊が付く。ドームと北側のミナレットの頂上には、三日月の飾りが乗る。三日月はイスラム教のシンボルである。

北側の正面には、イーワーンと呼ばれるアーチ状の開口が付く。イーワーンはヴォールト天井で覆われる半屋外空間であるが、ここでは敷地による制約によって奥行きは浅く装飾的である。イーワーンや窓の開口部に使われるアーチの形は、四心アーチと呼ばれる肩の張った尖頭アーチで、その周囲や軒などは幾何学紋様によって飾られている。

モスクは地上3階・地下1階で、1階が男性、2階が女性の礼拝所である。礼拝所には鮮やかな赤い絨毯が敷かれ、天井にはシャンデリアが飾られている。窓からは黄色いガラスを通して光が差し込み、礼拝空間全体を金色に染める。荘厳でありながら穏やかな空間である。礼拝所西側の壁がキブラ壁で、ミフラーブが穿かれている。ミフラーブの形状も他の開口部と同じ四心アーチで、それを2本の柱が支える。ミフラーブ上部の壁のアラビア文字は「アッラーのほかに崇拜に値するものはない。ムハンマドはアッラーの使者である」を意味する。また、ミフラーブの右側には、イマーム(宗教的なリーダー)のための説教台(ミンバル)がある。

神戸モスクでは、以前にはアザーンはミナレットから行われていたとのことである。住宅が周りにできたことから早朝のアザーンは控えられ、それ以外の時間帯もミナレットからおこなわれることはなくなった。しかし、神戸に根付いた敬虔なムスリムの信仰は、これからもこのモスクを中心はずっと受け継がれていくことだろう。

今年の兵庫探訪では、9回をかけて神戸の宗教建築を追った。以前に紹介した「関帝廟」もその一角に挙げることができよう。神戸には開港以来、世界の様々な国から集まった人たちが、互いに寛容に認め合い協力しながら築いてきた歴史がある。その一つの現れが、このような多様な宗教の友好的共存であろう。取材を終えて、この誇るべき「神戸モデル」が、世界に広まっていくことを祈らずにはおられない。



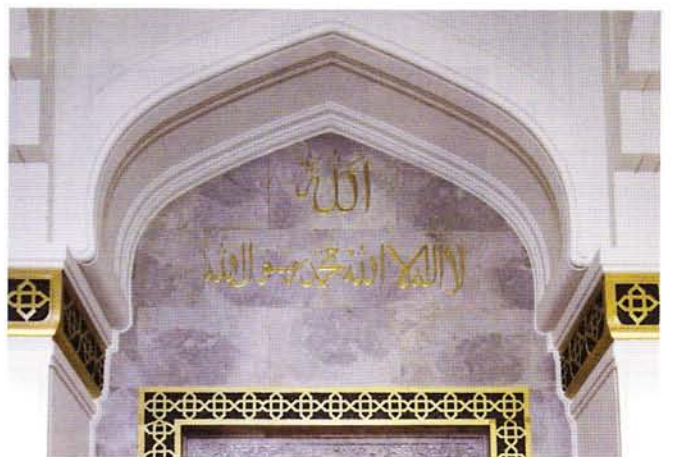
神戸大空襲後のモスク、周辺に立つのは燃え残った異人館の煙突(神戸ムスリムモスク提供)



ミフラーブ



イーワーン



ミフラーブ上部のアッラーを讃える言葉

参考資料

- 1.「イスラムの建築文化」 アンリ・スチールラン/原書房/1987
- 2.「日本におけるイスラーム布教の歴史と発展」/サリー・M・サマライ /イスラミックセンター・ジャパンHP <http://islamcenter.or.jp>
- 3.「多神教と一神教」 本村凌二/岩波書店/2005
- 4.日本ムスリム協会HP <http://muslimkyoukai.jp/>